家族形態の変遷について

「彗星物語」に登場する城田家は、三世代12人が一つ屋根の下に暮らしているという、現在では珍しい大家族です。近現代は核家族が主流となってきましたが、家族の形は昔と比べるとどのように変化してきたのでしょうか。ここでは日本における家族形態の変遷と近現代の家族にまつわるキーワードをご紹介します。

変化する家族形態

各年代の世相や家族形態の特徴をご紹介します。

年　代	世相と家族形態に関する特徴
戦後～経済復興 ～1960年頃	複数の世帯が共に暮らし、兄弟姉妹の数も多い大家族の形態が多く見られた。特に1947年～1949年にかけては第一次ベビーブームが起こり、人口が突出した。この期間に生まれた人たちのことを「団塊の世代」と呼ぶ。
高度経済成長期 1960年代～1980年代	高度成長期の中、核家族の家庭が急増。1960年代半ばのいざなぎ景気時代には、カラーテレビ（Color television）・クーラー（Cooler）・自動車（Car）の新・三種の神器（3C）が登場すると共に洗濯機や掃除機が普及し始め、主婦たちは長時間の家事から解放され、自分の時間を持つようになった。
バブル景気～崩壊 1980年代～2000年代	男女雇用機会均等法が1986年に施行され、働く女性が増加し晩婚化が進む。単親家族やシングル世帯の増加、DINKS（共働きで子どもがいない夫婦）という形態の出現等、多様な家族のあり方が現れ始める。
景気低迷時代に突入 2000年代～	核家族化や若者や高齢者の単独世帯の増加により、世帯人員が減少の一途をたどる。少子高齢化、未婚化、晩婚化が進行。家族政策としてワーク・ライフ・バランスや子育て支援策などが重視されるようになった。

現代の「家族」にまつわるキーワード

家族形態の変遷とともに、家族にまつわる様々な新語や造語が増えています。その中からいくつかをご紹介します。

DINKS（ディンクス）

DINKSとは、共働きで子供がいない夫婦、またそのライフスタイルを示した言葉。「Double Income No Kids（共働き収入、子供なし）」の頭文字から成っている欧米略語である。DINKSの増加は少子化社会に影響を及ぼしていると言われているが、経済的不安のために育児を断念しているケースもあり、現代社会における雇用問題も垣間見える家族形態といえる。対比語としてDEWKS「Double Employed With Kids（共働きで子育てをしている夫婦）」がある。

NEET（ニート）

1990年代末のイギリスにおいて生まれた「就業、就学、職業訓練のいずれもしていない若者」を指す造語。「Not in Employment, Education or Training」の頭文字から成っている。日本では「学校に通学せず、独身で、収入を伴う仕事をしていない15～34歳の個人」のうち「非求職型および非希望型」、つまり「就職活動していない」または「就職したくない」者を指す意味で用いられる。「ひきこもり」とともに、問題となっている。2000年代から使用され始めた。

個食／孤食

「個食」とは、家族が集まっていても個別の食事をとること。家族の繋がりが希薄になっているということの表れであると共に、子どもが自分の好きなものばかり食べるケースも見られることから、食育の面からも問題視されている。一方「孤食」とは、家族と別に一人で食事をとることを指す。両親が共働きで帰りが遅くなる、また塾などで自分の帰宅時間が家族と合わない等の理由から一人で食事をとる児童や生徒が多く見られる。栄養バランスを欠く可能性が高いことから生活習慣病の誘因としても問題視されている。

ワーク・ライフ・バランス

近年、労働者が仕事のために私生活を犠牲にしてしまうケースが多い。それによって心身ともに病に侵されてしまったり、安定した収入を得られないことが出生率低下に繋がり少子化に拍車をかけている。このような事態を改善すべく、ワーク・ライフ・バランスが叫ばれるようになった。2007年末には、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」が策定され、現在官民を挙げて様々な取組が進められている。

イクメン

いわゆる「イケメン」をもじった造語であり、育児を積極的に率先して行う男性、育児を楽しんで行う男性を意味する。産休による出産後、引き続き女性が育児を行うのが一般的であったが、育児休業基本給付金といった制度を利用し、育児休暇をとって積極的に育児を行う男性が増えた。しかし、休暇をとることにより収入が下がる、会社の評価が低くなるといった理由から、日本における事実上のイクメンの数は少ないのが現状である。

インビジブル・ファミリー

親世帯と子世帯が同居せず、近隣に住み、経済的・精神的に支えあう家族のあり方を指す言葉。「擬似同居家族」とも呼ばれる。親世帯にとっては、健康面や安全面での不安が軽減でき、子世帯にとっては子育ての精神面や経済面での負担が軽減できるという双方にメリットのある住まい方として、近年増加している。またインビジブル・ファミリーの増加に伴い、親・子・孫の三世帯を網羅するような旅行プランやレストランのサービス等がはじまっている。